

内と外からの日本文学

佐伯彰一



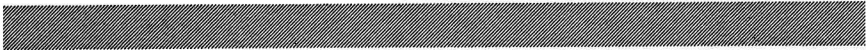
新潮選

日本文学史をつらぬく基本的な主題は、いかなるものであったか、その根源衝動は一体どこに存したのか……。もっぱら内に密着した見方、日本文学の文脈の中にすっぽりと入りこんだ上での答えなら、これまでもいろいろと提出されてきた。しかし、いったん外から突き放して眺めながら、内なる衝動にまでにじり寄ろうとする試みは意外と少ない。勝ちすぎた荷によるめきながら、問題の所在をつきとめようとしたのだが……。 著者

内と外からの日本文学

佐伯彰一

新潮選書



内と外からの日本文学 〈新潮選書〉

昭和四十四年五月二十五日 印刷
昭和四十四年五月三十日 発行

定価三八〇円

著者 佐伯彰一

発行者 佐藤亮一

印刷 光邦印刷株式会社

製本 植木製本所

東京都新宿区矢来町七一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二

電話東京(03)二六〇一一二一
振替東京八〇八番

（乱丁、落丁本はお取りかえいたします）

内と外からの日本文学
目次

Ⅰ	位置づけという難問……………	7
Ⅱ	アジア文学とはなにか……………	27
Ⅲ	岡倉天心の「衝動」……………	47
Ⅳ	西洋との対話者……………	69
Ⅴ	批評家のヴィジョン……………	91
Ⅵ	ふたつの衝動……………	113
Ⅶ	旅行家の思想……………	135
Ⅷ	「独立」という主題……………	155

Ⅸ	ふたりの文学史家……………	175
---	---------------	-----

X	津田左右吉と「国民文学」……………	195
---	-------------------	-----

XI	周辺文化の重荷……………	215
----	--------------	-----

	あとがき……………	244
--	-----------	-----

内と外からの日本文学

I 位置づけという難問

文化の中心と周辺

位置づけということが気にかかってならぬ国の文学があり、他方そんな問題は念頭にも浮べずに及ばぬ国の文学がある。

前者、つまり位置づけの気にかかる文学の筆頭が、わが日本文学だというのが、ぼくの年来のひそかな確信である。いや、これが一般論にすぎるといわれるなら、日本文学の位置づけということが、ぼくには、気になってならぬ、と言いかえてもよい。しかし、自国文学の位置に思いまどわざるを得ないぼくの念頭に、たとえば、同じ問題をかかえた同類として、ロシア文学、アメリカ文学、さらには少しく違った意味で、スペインや、近代化以後のトルコの場合などが、一連のものとして浮び上ってくるのだ。

さて、その反対側の、気にかからぬグループとして浮んでくるのは、まずフランス文学であり、ついで、ドイツ、イギリス、北欧など、いわゆる西欧諸国の文学であり、さらに絶対ぬかすことの出来ぬ、ほとんど典型的な例として中国文学がある。

この二つの対極的なグループをわかつものは何か。フランス文学の場合でいえば、位置づけ

など、そもそも問題にもならぬ。というのは、フランス文学こそただちにヨーロッパ文学そのものと言い切りたいような自信が、ほとんどアブリオリの大前提として生きている。ローマ文明の正統の嫡子という古来の確信が支え、いわゆる「偉大なる世紀」、ラシーヌ、モリエール、またバスカル、ラ・ロシュフコーの古典主義の汎ヨーロッパ的な制覇以来、ほとんど途切れることのなかった実績が控えている。国際関係における比重の変動は別として、文化上の自信と実力は揺らぐことはなかった。手近なところで、自然主義、象徴主義、また実存主義と、幅の広いインターナショナルな影響力をふるったほどの文学上の主義、運動にして、フランス起源でないものを探す方がむづかしい有様だ。もっともこの際のフランス「起源」は、じつの所、かなりいかがわしいので、皮肉な見方をすれば、真の創造者というよりは、巧妙な加工者、また理論的な精錬者、弁舌さわやかな文化的セールスマンたる所にこそ、フランス的「普遍性」の所以が存する、といたいほどだ。象徴主義といえ、誰しもボードレール、マラルメ、ヴァレリーの系譜をすぐ思い浮べるのだが、アメリカ人エドガー・アラン・ポーによる衝撃と詩的理論こそ発火点の役割を果たしたものであったし、さらには「英語教師」マラルメの経歴を思い合せれば、イギリス詩の北方の霧をただよわせた、縹渺たる「象徴的」な趣のフランス的な移植という一面を見逃すことは出来ない。またフランスの専売特許の感のあった、戦後の実存主義の場合も、デンマーク人キェルケゴール、またドイツ人ハイデッガーの根源的な発見を引き去ってみれば、果して何が残るだろうか。これまた、巧妙な移植であり、理論的な純化洗練であり、一般向きに味を薄めた普遍化ではなかったか。根からじっくりと養い育てた原産物とい

う訳にはゆくまい。ひと目をひくに至らぬローカルな風変りな植物にいち早く注目して、これ移植して、苅りこみ、枝ぶりを直して、国際市場向きに仕立て上げる素早さと手練、そんな悪口さえ叩きたくなってくる。

「普遍化」の手際が、余りに鮮やかで、折々の国際的な規格に余りに見事に合致しているからだ。素早い着目と移入が、そのまま不断の文化輸出につながっている。まことに、臆面もない奪いぶりであり、手際のいい加工ぶりであった。借用、転用にからむ引け目、後ろめたさは、いささかもみとめられない。下請けの職人の製品に、わずかな仕上げをほどこすだけで、自家製の極めつきとして悠々と売り出す、由緒ある老舗の主人の自信を思わせるふしさである。こういった悪口を叩かずにいられぬほどの、糞落着きに落着きはらった自信であり、実績であった。こういう国の文学や思想については、位置づけなどは、頭から問題になるまい。ヨーロッパ文化の中心という自信があり、また自国製はいつでも必ず世界に通用してきたという実績の力が物を言う。

中国文学の場合は、これとは趣を異にしている。フランス風な、国際市場向けの「普遍性」は、ここには縁がない。インターナショナルな「普遍性」への熱意は、はなはだ稀薄といっている。むしろ、文化的な鎖国性こそ中国文化のノーマルな正統ではなかったか。ここにあるのは、自給自足、自己完結性への揺がぬ自信である。フランスの場合が、開かれた自信なら、これは閉ざされた自信というべきだろう。戦後の急激な共産主義化は、なるほど「国際的」なイデオロギーに対する全面的な降服のごとくだが、その反面に、きわめて閉鎖的、ほとんど攘夷

的といっている、排外的な自給自足性への動きをまとめざるを得ない。「国際的」な普遍主義への接近が、ただちに、反動として、あるいは代償作用として、激烈な閉鎖的な自己主張をよび起した、という気さえするほどだ。こういう政治的な情勢論は別としても、中国には、それ自体が一個の有機的に完結した文明である、という自信が一貫してきた。このいささか強大すぎる自信が、近代化という西欧の衝撃の前に、この巨人を無器用によりめかせる結果をまねいたにしろ、みずからが一個の文明だという大前提までが、ゆらぎ覆ったとは到底思えない。位置づけという自己証明への情熱などは、ここには縁のない話であらう。

フランスと中国は、はた目にはやり切れないほど自国中心意識の際立つて肥大した場合だが、ほかの西欧諸国の場合も、主我性の度合いは、はるかに薄いにせよ、ヨーロッパ文化の一部という帰属の意識は、つねに明確であった。ドーヴァ海峡をへだてた島国イギリスの作家たちも、ときに「大陸」の文化現象に対して、微妙な反応を示し、ある世代がつよい憧れの表情をあらわにすると、次の世代は、ただちに苛立たしげな反撥に傾くといった交代さえ認められることがあるにせよ（たとえば、身近なところでヴァージニア・ウルフやリットン・ストレーチェイらの「ブルームズベリィ・グループ」に著しかったフランス好きに対して、F・R・リーヴィスを手頭とする次代の批評グループが、鋭く批判し、イギリス固有の倫理的な伝統の強調に傾くといった）、イギリス文学の位置づけ自体を問題にすることは、絶えて起らない。

これに対して、位置づけを気にせざるを得ない国として多くのあげたスペインやトルコ、またロシアやアメリカなどに共通するのは、フランスや中国の中央意識、中華思想と対照的に、

辺境的、あるいは周縁的な位置であり、少なくともその意識である。ヨーロッパの辺境に位置する所から、いちじるしく異質的な文化との衝突、せめぎ合いの場所となり、また、遠く隔たっている所から、中央に対して独特な反応、意識を育てざるを得なくなる。スペインは、地理的にも、ヨーロッパとアフリカとのいわば中間地帯であり、その陽光の強烈さ、きびしい乾燥度において、南欧というよりは、アフリカ的というに近い。のみならず、三百年をこえるアラビア支配の歴史があり、初歩的なスペイン文学史ですら、アラビア語で書かれたベドウィン語のバラードや諷刺詩に、たっぷり一章を割くことを忘れていない。そして「この本は、個の国語で書かれた文学史ではなくて、一国民の文学作品を対象とする文学史だ」と、序文でわざわざ断わっている。この断わり書は、もともとアラビア語だけのせいではない。「カタルーニャ語方言の文学」という項目もあるのだから。因に、引用はジェラルド・ブレナンの『スペイン文学史』(Gerald Brenan: The Literature of the Spanish People. 1961)

「近代化」以後のトルコ文学については、ローマ字採用によって文字まで「西欧化」した訳だから、その位置づけは、一層切実かつ微妙な問題であるはずだ。古来のイスラム的な伝統と完全に「断絶」して、そのまま西欧との直結を目ざしたとしても、ほかならぬ文学の場合は、そんなことが果して可能かどうか。トルコにおける「近代化」自体については、日本の場合と比較した、アメリカの学者たち(日本の学者も参加している)による共同研究も出ているが、近代化の「成功度」という所に重点がおかれ、トルコ人の文学意識の微妙な内側にまで探りを入れた論文は一つもなかったと記憶する。また、かなり以前になるが、中村光夫氏の『旅の話』

にトルコ訪問記が入っており、フランス女と結婚している、トルコのフランス文学教授の風貌の印象的なスケッチを通して、この問題にふれていた。中村氏は、「近代化」以後のトルコに、「私小説」が多いという話も書きとめているので、ぼくらの関心は、いよいよ切実なものたざるを得ない。直接この間の事情に詳しい専門の研究者からの立ち入った報告が、ぜひ読みたいものである。

アメリカ人の「苦境」

さて、手もとの一般読者向きの『アメリカ文学史』をひらくと、冒頭にこんな逸話がひいてあって、ぼくらを驚かす。イギリスの大批評家マッシュ・アーノルドに、こんな一節が見つかるそうだ。『アメリカ文学入門』と称する本の広告を見る。冗談じゃない、フィリップやアレクサンダーが、マケドニア文学入門といった本のことを聞いた際の表情を思い描いて見給え！……我々はすべて一個の偉大な文学、イギリス文学の担い手ではないか。」つまり、アーノルドは、アメリカ文学などというものを、てんから認めていないのだ。ギリシャ文学に対して、マケドニア文学を言い立てる程度の、無意味さ、滑稽さとして、頭から割り切っているのだ。これは、七十年ほど前の話には違いないが、すでに『緋文字』やエマソンはもちろん、ポーも『白鯨』も『草の葉』も出ており、さらにはマーク・トウェインまでも書き始めていた。しかも、これは楽天的なお国自慢のイギリス人の、無邪気な放言ではなかった。素人ののん気な独